

文芸プラザ

「おまちやしないな。あわつたんだって考  
なきゃ、生きていけないよ……」

いつもはちゃんとやるとしている玲子が、  
諭すうちに言つたのが、由美子には可笑ひで  
あるんだからね。加藤君と結婚する例だつて  
まちやしないな。あわつたんだって考  
なきゃ、生きていけないよ……」

加藤からの電話は着信拒否していた。公  
衆電話からも、何度も電話が掛かってきたが、  
由美子は無視するにした。  
手紙は相変わらず數通届いたが、  
開封せずにいたら、加藤からは  
がきが舞い込んだ。

「許して欲しい。許して欲しい。許  
して欲しい。『何も覚えていないんで  
す』と結んで、『あつた。くじら』と  
作ひを書かれるよりは、加藤の苦  
惱が由美子に伝わってきた。

由美子は實に感動のはがき、「段  
水、盆に帰らす」と書いてから、  
玲子から聞いた話を語った。「もう  
お酒を呑むのは、止めてください。  
お互いの人生を生きて行きましょう」と語  
った。

加藤からは何の連絡も来なくなった。大學生  
在校中に数回会つたけれども、お互いに避け  
ていた。たゞ、加藤はあれ以来、何となく人生  
気がなくて、どこかしらほんやりしている風  
だった。由美子は大学を卒業してから商社に  
勤めだし、加藤は適当な就職先がなかつた  
ともあり、大学院に進学したという話を聞い  
たきりで、その後は風の便りできさえも噂を聞  
くことはなかつた。だから、由美子の頭の中  
には、始めての性体験をした男として、沈没  
した思い出の深いところから然佛さあがつ  
て来るとはあつたけれども、毎日の日常的  
雑務の中で、消え入ろうとしていた人間だっ  
た。

- 38 - 五 月 一 九四三年

パンの箱

## ペンの復讐 （下）

今井  
隆



二月がほんたつた雨がとじて降る夜、いつもなく遅く直人が帰ってきた。早なかうちにからついており、リビングルームにいる娘の匂いが強烈に漂った。

直人が、窓の中から小説、近未来を取り出して、テーブルの上にぽんと置いた。

そして水道水をコップに勢いよくついで、一口に飲み干した。由美子の背を向けてまことに、折り出された口音があがめられた。

「今日はいいぞ。おっぽいの描写があるんで、前の方を読んだから聞き度してくるが、ほんどの位置がお前と同じだ。まるでこの作者は」

由美子は、山田吾郎が加藤登志雄その人のことを説明した。由美子の体を知つて、あさりと胸元を覗きこむ。

つなるほどお金があるという話を直人から聞いたことも、由美子の背中を押した。それで、ちっぽけ読むだけだったけれども、直人が「小説・近未來」を長く購読しているのも、好感が持てた。もちろん由美子も雑刊以来の読者だったから、話が合った。  
それほど直人が好きだったのでないけれども、由美子の母親が「結婚には時期と言つるものがあるからね。いい人じゃない、私たちはどちらすぐに決めるわよ」と言つたことが、迷っていた由美子を結婚へと決断させたのだ  
由美子は、専業主婦としてマンションの一室で暮らす。お隣さんが、田口と龜石、向かいが佐藤さんだ。

近頃初めに話すとマイクをノーダ水で割ってひちひと呑んだ。すぐに気分が良くなつてパソコンを打つスピードは單くなつた気がない。うまく書けたと思われた文章は、後でみ返すと手垢の付いた表現であつたり、独り言が多かったりして、縮んだごみ船腹のようななまづくらしの文章に思えた。やもめられたマイスキーパーが無くなると、酒類屋からもらったマイスキーパーを持つてさせ、封を切つた。小説・近未来のことは、気になつて仕方なかつた。本心は続きを読みたいのだけれども、懸念のに過ぎなければ解られないといふで、むかしい姉妹になつた。